

論稿 I

本稿は、秀松が農業共済組合連合会理事長であったころ、雑誌『四次元』第 4 巻、第 4 号（昭和 27 年 6 月）に掲載されたものからの抜粋です。賢治・秀松研究に新たな地平を開く資料です。

グスコーブドリの伝記について

—賢治の詩や童話はみんな林や野山や月等からじかに感受した心象スケッチである—

高橋 秀松

今ここにこの稿を寄せる所以のものは“四次元”の読者が賢治をして徒らに社会革命的思想家と思いをしたりあるいは菩薩そのものにまで彼を祭りあげたりすることは、私の見る賢治にとってはどんなに迷惑なことかわからないのです。賢治はただ純粋な真理探究の求道者であつてこそ、銀河系の生ける微塵として私共に親しまれるのであります。単なる社会主義的革命思想家というような、対蹠的且つ部分的な存在に誤り考られるということは、よりよく彼を知る私として黙し得ないものがあるのです。彼が生前自費出版したイーハトーヴ童話集「注文の多い料理店」の序文に

「これらのわたくしのおはなしは、みんな林や野はらや鉄道線路やらで、虻や月あかりからもらつてきたのです。ほんとうに、かしはばやしの青い夕方を、ひとりで通りかかつたり、十一月の山の風のなかに、ふるへながら立つたりしますと、もうどうしてもこんな気がしてしかたないのです。ほんたうにもう、どうしてもこんなことがあるやうでしかたないといふことを、わたくしはそのとほり書いたまでです。」

この序文こそ賢治が詩や童話を作るときの偽らない態度だと私ば思うのです。盛岡高農時代三カ年の間彼とともに、山野を歩き廻ったときの経験に於いても、帰するところは同じなのです。

・ ・ ・ ・ ・

彼は平常冷害や早害で飢餓に苦しむ東北の農民の事を苦にして、如何にしてこの冷害から救うべきか、早害防除対策はどうするかを盛岡高農一年生の時(大正四年六月頃)から私と談じ合い、互の分野で研究しようという約束さえしたものでした。賢治は専門の化学の方面から即ち肥料土壌気象学の面から何等かの手を打てるだろうと、自ら研究もし稗貫郡全体詳密土性調査も神野教授等と共になしとげ、然る後に肥料設計所を設けて大いにやつたものです。しかしこれだけでは冷害を防ぎ切る事が出来ませんでした。それに品種改良の面を担当する事を約束した私がいつの間にか見切りをつけて政治経済学の方へ転向して了つたのですから、彼はどんなに私に不満をいだき失望したか知れないわけです。というわけで賢治が農業の専門学校を目ざした動機は最初から東北農民をして致命的な天然災害から救わんがためであつたこと、それがもし成し遂げられなかつた場合に考えられたのが気温上昇の人工作業だつたわけです。